

第6回 火葬

1989年12月19日(火)の日記「あるバラモンの火葬」より。

8時半起床。朝食後プロモッド(筆者が世話になったバジュパイ家の長男)はラクナウにもどる。11時前にベジタリアンの食堂で早めの昼食を取り、11時15分発のバスに間に合うべくエミリアパークへ急ぐ。サンディラの市街地を抜ける途中でビノッド(次男。私のアシスタント)が誰かと1、2分立ち話をする。終わってすぐ、私のところへ駆け寄り、大変なことが起こったという。姉さんの夫の弟(ラマ・カーン、22歳)の奥さん(20歳)が今朝急死したらしい。シュレンダー(三男)が早朝25kmの道を自転車で飛ばしてビノッドに知らせにきたが、我々の宿舎がわからず帰ったらしい。

10日前に1度デマ事件があったので、今回もデマだと祈りつつ、バスは1時間遅れたが、アトラウリに向かった。今日予定している市カウリアへの、途中でラマカーンの家があるので、ともかくそこへ行くことにした。アトラウリに一時着。そこでビノッドの友達に確かめると、不幸は実際に起こったとの事だ。市へ行くのはもちろん中止。ビノッドにはすぐ彼の家に行ってもらうことにした。私はサンディラへひきあげると話したが、是非一緒に訪ねて欲しいと言う。よそ者が迷惑をかけてはいけないとの気持が強かったが、そんなことはないというすすめで、ついて行くことにした。

ラマカーンには3回ほど市回りに付き添ってもらい、自転車に乗せてもらい世話になっている。前にシャルンダスプール市の帰りに彼の家に立ち寄り、チャイを御馳走にもなっている。その時奥さんには会っていないが、鹿野先生は以前に何回か立ちより元気な奥さんの写真を撮っている。彼らは3年前に結婚し2歳と6カ月の2人の男の子がある。彼の家の外庭についたら、30人ほどの男の人が話もせず哀しそうに座っている。不幸が現実になった。ビノッドが急いで家の中に入ったとおもうや、すぐでてきて私を呼び入れてくれた。

これから3時間という短い時間に起こった出来事は、あまりにも哀しく、あまりにも美しいバラモンの別れの儀式である。

午後1時50分、連れて行かれるまま入口をくぐり、中庭に入ったら、十数人の女性の泣きじゃくる中、地面に敷かれた毛布の上に亡くなった服装のまま奥さんの遺体が仰向けに横たえられ、頭のすぐ右横にお母さん、その隣りに妹(亡くなった奥さんは三人姉妹の真ん中、長女も数年前に他界、実はこの長女の生前の写真は黄ばんだ小さいのが一つしかなく、鹿野先生も私もそれを接写して大きく写しなおすよう頼まれたばかりである)が寄り添い、胸をさすり、顔になんどもほおずりし、号泣しつづけている(写真12)。写真を撮ってもいいと許されてはいたが、とてもシャッターを切る勇気は無く、ビノッドにカメラを渡して彼に好きなように撮ってもらい、私はビノッドの親父さんと並んで人垣の後にたたずんでいた。男性で中に入れるのは親戚と手伝いの人に限られるのだが、特別に入れてくれた。狭い庭なので、一番後の壁にもたれていたとはいえ、遺体の頭はすぐ目の前にある。あまりの哀しさに妹は気が動転し、仰向けに失神してしまった。介抱されて意識がも

どるや、また遺体に寄り添い、さすり、ほおずりを繰り返す。こんどは母親が失神してしまった。そして、妹は2回目の失神（写真13）。

まもなく、デコレーションが始まった。足の指、回りが赤くペイントされ、足の親指と親指がひもで結ばれた。髪の毛がとかれ、足首に銀の輪、手首にはバングルがはめられる。体が硬直しているのではなかなか思うようにはめられない。ここで残された夫の最初の仕事として、ラマカーンは亡き妻の髪の中央の分け目に赤い粉（シンドール）を塗り、続いて金銀のリング、ネックレスをナイフで削ったひとかけらを口の中に入れる。しばらくして、結婚式の時に着用した金の刺しゅうがしてある赤いサリーがかぶせられた。ここで、着替えをさせるため男性はしばらく立ち退くように求められた。

着替えが済むと呼出された。写真はむしろ求められているようなので、勇気をだして私が撮ることにした。ビノッドも手伝っているところを撮ってほしいらしい。真っ赤なサリーで頭がおおわれ、身がつつまれ、ひもで縛られた。夫のラマカーンが聖水で清められた後、亡き妻に寄り添い、野球ボール大の大麥でできたおむすび三つのうち一つを、サリーの下の妻の手にもたせた。そのころ庭で切り取った青竹（古いのはダメ）でつくった遺体の運び台が持ち込まれた。そして、サリーにつつまれた体は青竹の台の上に載せられた。

2時20分、遺体は外に担ぎだされる。担ぐのはラマカーンと彼の父がたの祖父の弟の子供2人とバラワンへ移住した曾祖父の子孫（兄は許されない）。火葬場までの行進が始まる（写真14）。女性たちは家の中に入ったままで外には出ず、火葬には参加しない。外で待機していた男たちが行列に加わる。火葬は、宅地から数十メートルのところにある自分の土地の森の中だ。途中、遺体は道に降ろされ、二つ目のおむすびがこんどは胸の位置に捧げられた。

そして、森に入った。森の中のやや開けた場所で、ラマカーンによって最初に杭で五回つつかれた所に、火葬台が作られていた。この身長大の火葬台は床屋と親戚の人々によって、丸太、小枝、カンダ（牛糞の燃料）で作られたものだ。二つの土器に入れられた水で体を清めたラマカーンの手により、三つめのおむすびがサリーの中に入れられ、その遺体が火葬台（チタ）に載せられた。さらに遺体の両側、上部にも丸太が載せられ、まわりには燃えやすい小枝が調えられた（写真15）。

2時23分ラマカーンは火がつけられた葦の束をもって、火葬台の周りを5周左回りし、頭の後に立ち、火入れをした。火は勢いよく燃え上がり、天をおおう（写真16）。付添いの男たちは、火葬台を半円状に取り囲む。どの位置からも頭と肩がよく見える。サリーはすぐに焼け体はみるみる焦げていく。しばらくしてちょっと火力が弱くなるとラマカーンの父親がラル（火力を強めるための粒状の薬品）を投入する。3時9分、ラマカーンは3mほどの先のとがった部分にギー（バター油）を付け、黒焦げになった頭部をつつく（写真17）。頭は少し動いただけでしっかりしていた。次に彼はギーをいっぱい手にとり、頭部の近くに投げ入れる。3時36分、頭部が少し白くなってきたとき、ラマカーンは再び先ほどの木をとり、頭部をついた。頭蓋骨はパカッと割れ、からからに焼けた脳味噌がバラバ

ラと崩れ落ちた。火葬の儀式が終わった瞬間だ。

皆一斉に立ち上がり、近寄り、枯れ木をチタに投げ入れる。そして即座に火葬場の森を離れ、近くの池に向かった。最初にラマカーンが飛び込み、潜り、手に水をすくい、その水に胡麻をふりかけてもらって、池を出る。親戚一同順不動で後に続く（写真 18）。私も、枯れ木を投げ入れるのと、水をすくうのはさせられた。

この儀式が終わると皆母屋に戻った。ゴンドワから来た母親、親戚、友人の女性たちは、1台のトラクターの荷台に乗り込んで早くも帰る所であった。荷台の中でも母親は泣き崩れていた。本来ならもうしばらく残り、この日初めて口にするグル（ヤシの粗糖）とペダ（ミルク菓子）を、皆で食べるころなのだが、娘を若くして亡くした母親は娘の財産箱の鍵を持って早々に立ち去るのだという。夫側の家族に対してよく思っていないとか、少々疑いすら抱いているそうだ。ビノッドは本来なら同居しているはずの自分の姉がたまたま実家に帰省中だったので、直接疑いをかけられずにすんでホッとしているという。

4時半、残った者でグルとペダを食べる。女性たちは井戸へ行き水浴びをする。何枚も家族写真を撮られる。この日家族は米とグルをミックスしたスイートライスしか食べられない。そして、ダシュワンサンスカール（10日後の法事、今回は日が悪いので2日早めて12月27日（水）におこなわれる）まで、野菜料理、油を使ったプリは口にできない。ローティ、ライス、ダルスープとグルのみが許される。ラマカーン自身はさらに2日後のトラヨダササンスカール（村ではテリサンスカールといわれている）まで家の中には入れない。庭の小屋かどこかで自分で料理しなければならない。使うのが許される道具は儀式の時使った大麦のだんごをのせた皿（タリ）と小瓶（ロタ）だけである。いかなる人にも触れてはいけない。この日まで家族の男性は葬儀の時の池で、女性は井戸で水浴びをすることになっている。

5時、焚き火を囲んでしょんぼりとするラマカーンに別れを告げる。



写真 12 バラモン
女性の死
遺体となった女性
を取り囲む。彼女
の家の中庭にて。



写真 13 失神する妹
硬直する腕にプレスレ
ットがなかなか入り込
まない。



写真 14 火葬場への
運搬
担架は新鮮な青竹で
ないといけない。



写真 15 火葬台を作
る床屋（右端）
火葬台の廻りは牛糞の
燃料。



写真 16 火入れ
ここは女性立ち入り禁止。



写真 17 頭蓋骨突き
頭蓋骨が割れ、乾いた脳みそが崩れ落ちると火葬の儀式が終わる。



写真 18 清めの沐浴
火葬場の森から帰宅途中に、池に入り身を清めた。